

研究発表

西洋から見た日本の女流日記文学の伝統

The Japanese Feminine Literary Diary
Tradition in a Western Perspective

キャサリン・ブロデリック*

Abstract

Western literature has nothing comparable to the long and respected tradition of the feminine literary diary in Japan. This unique genre in its literary sophistication and provision of literary role models is of much interest to those attempting an understanding of the newly flourishing literary diary genre in the West. The intricate relationship between social conditions and status of women and literary accomplishment provides us with one of the explanations for the rise of this genre in the West coincident with its decline in Japan. The Japanese concept of the literary significance of experience has made the literary rendering of experience natural in Japanese literature. The feminine literary diary is based on this concept, as is its modern offshoot, the “watakushi-shosetsu” or private “I-novel” and both of these Japanese forms are alien to the Western values of individual, directly rendered experience.

This paper examines the feminine literary diary tradi-

※ Catherine Broderick [現職] 神戸女学院大学助教授

tion in Japan from the earliest Court diaries by men in the 10th century, through the Tosa Nikki and the Heian Diaries up to the modern literary diaries of Ichiyo Higuchi and Itsue Takamure. It also suggests the degeneration of the genre in the best-seller "suicide diaries" of the 20th century, and its regeneration in the contemporary feminine "I-novel." The *raison d'être* of the Japanese feminine literary diary as an expression of "feminine conflict" is also examined in literary terms, and the concepts of mutability and fragmentation are considered from a Western point of view to explain much that seems trivial to Westerners as being the very essence of the genre called "Nikki Bungaku" or diary literature in Japan.

Lastly, the Japanese criticism of Western feminine diaries will be examined in the light of the native Japanese genre, and the deeper understanding which can be reached as a result of such a comparative study will be demonstrated.

西洋の思想は、芸術作品の中においては漠然とはしているが、普遍的な心理についての信念を表わしています。文学に見られる経験は、理論的に誰にでも受け入れられるはずです。なぜなら、文学は万人に属するものであり、人生の実際的な見方や、作家の考え方は、年月を経るにつれて、歪曲されてしまいます。しかし、作家の生み出した芸術は、いつまでももとのまま、生氣に満ち、生き生きしています。しかしながら、創造という行為は、又、作品中に人を支配する有限の諸相、すなわち、時間、場所、社会思想、固定化された習俗の限定や、個人的な考えが入れられます。

ではなぜ、日本の女流日記文学を、西洋から見た詳細な研究の題材として選ぶのか、この日記文学を女流日記文学として分類するのは、日本人よりもむしろ西洋人です。西洋人は、審美的遺産が地中海に生まれ、男性優位の基盤の上に存続した遺産であることを明らかにすると共に、この女性の創造力の独特のあらわれ方に関しては、日本人よりも敏感なのです。そして、私達は、日本人が全く疑問をいだかないところの、この女性によって表わされた創造力の性質を問題にします。熱心に、しかしある種の偏見を持ちながらも、女性の創造力についての私達の問いの答えになる様なものを見つけようと、日本文学に足を踏み入れることになったのです。

私達の期待に反して、日本の女流作家達は、この問いに答えてくれません。日本人が、女流作家については、その人物像や作風を文学的に、妥当性のあるものとして、広く受け入れていることを見いだします。しかし、西洋人は、すぐにこの様な日本の特権的な存在としての、女流作家の存在を、説明してくれるものを求めますが、社会的、文学的、個人的な観点から適切な説明が得られないので、私達は当惑します。「ツァイトガイスト」という便利な言葉ですら、十分に満足するようなものを何も与えてはくれません。それで、私達はどうしても何らかの解決を得ようとして、作品本文の研究の方法を取ります。

日記が、ある人格の誕生を記録するのであるという考え方は日本人のもの

ではありません。アメリカ人にとっては、日記において、内的、心理的経験の妥当性を主張するということがショックであったが、日本の文学的伝統の中では、ありふれた様式でしかないのです。日本の純文学の読者は、大衆文学の読者と区別されますが、この様な事は、アメリカ人にはありません。この日本の、純文学の読者は、自己の露呈や、心理的探求という内容には興味を示さず、むしろ新しいスタイル、完璧な文学作品としての型や、美しい辞句の用い方に熱中します。日記や、女流の内省的な作品が、アメリカ文学界においてブームになったことは、個人的、心理的なものの表現が、受け入れられたのです。こういった個人的なものを、受け入れるべきか否かといった事は、日本の文学的風土の中では、意味を持たないのです。日本人の文学的衝動の中心になるのは、男女にかかわらず、私が誰であるかということよりも、人生とは何であるかという問題、又、自分自身の個人的経験を、世間一般の生や経験にいかにか溶け込ませるかという問題です。こういった態度は、西洋的な、私的、個人的自己探求の考えとは全く相反するものです。

私は誰なのかという問いは、平安朝の女性には無縁のものでした。彼女達には、自分が誰であるかということは、自明の事柄であり、その当然の帰結としての限界と諦観をすべて受け入れていました。平安女性の日記は、過去をふり返り、思い出の中の悲痛さに意味があったという事を、文章がおのずから明らかにしてくれはすまいかという様な期待感をもって書きつづられ、自分だけが特別なわけではない、自分の様な目に会えば、他の人々も、同じ様に感じるはずであるという納得を得ようとするものなのです。

西洋の日記は、常に前向きであり、自己自身の統合を目指す苦闘、数々の問い、反抗、進歩を描くものであり、西洋の日記は常に不完全で、創造の途上にあり、あるゴールに到達しようとするものです。アメリカ文学者の、原（柄谷）真佐子は、こういう西洋の日記観を、

「アメリカにおける日記や自伝の、素朴な直接性」としてしています。日本人は、西洋の日記を、文学的な洗練の欠けるものと考えており、西洋人は、日

本の日記文学を、異なる次元に属する、かけ離れたものと見ています。日本の日記文学は、葛藤を、単に書きとめるものとして存在しています。葛藤は、西洋文学における様に、自己同一性の探求に焦点を合わせてとらえられることはありません。日本の日記文学者は、自己の知覚、感覚、感情を客観化し、自分の考え方や、外的世界との闘争の反映であり、自己の内的葛藤や、強迫観念を模索する手がかりではなく、個人的な気持ちを、ただ直截に表わしません。日本の日記文学者は、自己の経験に溺れるが、西洋人は、常に自己の経験を超越しようと、あるいは、少なくとも克服しようとします。日本の日記は、自己の試金石ではありません。日本の日記は、断片の寄せ集めであり、又、断片のままでの表現であり、同時に、仏教でいう「融通無礙」な生き方を示すものなのです。西洋人が読むと、一つの流れ、統一性、統合性が欠ける様に思えるのです。

こういった性格は、決して悪いものではありません。東洋と西洋では、「変わっていく」という事の意味が、非常にちがいます。日本人は、西洋で言う、「生涯かけて、成しえなかった事業」という考えに、おびやかされる事はありません。日本人の「循環する宇宙」という考え方は、個人の断片的な生を越えたところに、一切置いています。私達西洋人にとって、「変わっていくこと」は、低下していくというニュアンスを含んでおり、不吉とさえ言えます。その為、西洋人は一個人の生を形成する変化の断片を、常に理解可能なもの、統一のとれたものとし、全体としての意味を、把握しようとするのです。

西洋の日記作者は、ある瞬間をとらえ、時の経過に伴って変化してしまう前に、記録しようとします。過去は、真実味を欠いており、記憶は常に疑わしいものなのですが、逆に、「蜻蛉日記」の冒頭は、

「かくありし時過ぎて、世の中に、いとものはかなく、とにもかくにもつかで、世にふる人ありけり。かたちとても人にも似ず、心魂にもあるにもあらで、かうもののやうにもあらであるもことわりとおもひつつ、ただ臥し起

き明かし暮すままに、世の中におほかる古物語のはしなどを見れば、世に多かるそらごとだにあり。人にもあらぬ身の上まで書き、日記して珍らしきさまにもありなむ、天の下の人の品たかきやと問はむためしにもせよかしと覚ゆるも、過ぎにし年月ごろのこともおぼつかなかりければ、さてもありぬべきことなむ多かりける』

となっています。日本的な、「文芸」重視は、日本文学を、西洋文学に於ける、非常に価値があると見なされている即時性とは離れたものです。「秋山虔」の言っている様に、こういった意味では、紫式部が、最も西洋の観点に近いのではないのでしょうか。と言うのも、紫式部の日記は、書こうとする事が、書くにつれて脳裏に浮かび上がってきて、彼女の内的世界、内的心理が、文章の中におのずから描き出されているからです。西洋人は、源氏に、あの様なバイタリティを与えたのと全く同じ生気を感じます。ほとんどの日本の女流日記は、悲痛、寂寥あるいは絶望感によってメランコリックな暗いものとなっているからです。この詠歎の伝統は、多くの近代女流私小説の喜ぶべからざるトーンとなってしまっていますが、平安朝の日記作者は、洗練され、高度に哲学的であった手によって、立派に後世に残り得るものとなっています。

室町時代から明治時代にかけての日本では、女性による文学的な日記が生まれませんでした。武士階級の繁栄した社会において、日記文学は沈滞しましたが、皮肉にも、武家制度の崩壊は、数少ない近代日本の女流日記作家の一人である「樋口一葉」の出現をうながしました。彼女は、平安朝の日記形式を、近代文学に伝えました。もともと、その形式は、存続しませんでした。が、旧い形式から新しい形式への変遷は、彼女自身の、文学にたずさわっているという意識の上で、重要な事でした。自己の存在や、立場を、喜んで受け入れるところに基盤を置いた自己吟味は、日本の日記にあっては、生き生きとして強く、動的な文体となっています。反対に、私達西洋人の場合、文体はさらに「フェミニン」になり、それはすなわち、柔和で柔軟、焦点が

なく、もろいことなのです。

日本の日記文学を、西洋の日記と比較するのは、ほとんど不可能で、それは、何よりもまず、文化的価値の問題にまでなります。つまり、「断片的」という事は、私達西洋人にとっては、欠陥を意味するが、日本人にとっては、そうではありません。西洋人の自己探求は、日本人によっては拒絶されませんが、同じ意味を持つわけではありません。日本等の文化では、社会や自然、先祖や次の世代に「同化する」事が典型であり、文学的な表現における「絶えまない流れ」の本質は、全く西洋のものと、くい違っています。日本人はすべてを「流れ」というものに理解し、それ故に、意のままに、断片的なものに専心することができます。決して「流れ」というものに疑問を抱くことがありません。一方、西洋人は、「断片」の理解に苦しみ、西洋人にとっては不自然とも思える「流れ」というものに、なんとかこの「断片」を融合させようとします。日本文学を研究する西洋人は、まるで漱石の「吾輩は猫である」の最後の、水に溺れる猫の様です。すなわち、

「吾輩の足は三寸に足らぬ。よし水の面にからだが浮いて、浮いた所から思ふ存分前足をのばしたって、五寸にあまるかめの縁に、爪のかかり様がない」と。

西洋人が、人間の内面に入って行き、自己というものを研究し、吟味するのに対して、日本人は、内部にある自分というものを、虚飾なしに、ありのままに露呈します。西洋人の自己についての関心は、文学指向性の強い日本人には、未熟と言わないまでも、ロマンティックなものに見えます。アメリカ人にとって、西洋人が日記に、心情や、生活のすべてを取り込もうとする願望は、本質を保ちながらも、どれほど省略でき得るか、どれほど、仏教で言うところの「融通無碍」（自由で、物にとらわれない様子）であり得るかということに対する日本人の関心とは、大いにかけ離れたものです。日本人にとっては、表現されるべき最小限の事が、適切な形式と、文学的な言いまわしで述べられなければならない。形式として、又、個人的、心理学的な散

文詩の一種としての日記は、おそらくその実際の内容以上に重要視されるのです。人間の感情や、人間の見識を連ねた文章は、無駄な言葉を控え、そのものだけで表現されるべきです。西洋人は、日本人のこういった事に対して賞讃しますが、それにならうことはできません。

西洋の見地からの日本女流日記文学における相違点の、このような研究は、各々の伝統が築いてきたものを解明するのに役立ちます。日記形式は、文学において最も内省的なものです。各自の方法で、各々の事を語ることによって、日本の女流作家も西洋の女流作家も共に私達の経験を豊かなものにし、作品の意義を証明することになるのです。

討議要旨

齊藤明氏（カナダ、アメリカ十一大学連合日本研究センター）より、発表の限りにおいて「西洋」なるものの実体が不明であり、もっと個別的なものに即さないと説得性を欠く、との発言があり、これに対して「西洋」というのは、批評における一つの立場であり、ギリシャ文明をその源とする男性優位の文学伝統にたつものであると考える、旨の返答があった。

位藤邦生氏（広島大学）より、割り切りすぎて独断的ではないか、「紫式部日記」においては、‘私とは何であるか、’という問題は重要である。異質なものの比較には、もう少し視点、座標軸をしっかりと定めてから行う必要があるのではないか、との指摘があった。発表者から、日本の女流日記は、西洋の自己探求（私とは何であるか）と考えられる旨の返答があった。